

改作でテキストがうろつなくなる

周喬澤

テキストが付いたり離れたりすることで、入り組んだ複雑な文学の世界が構成されています。否定できない事実のひとつとして、多くのテキストはうろついています。「古くさい」解釈の固まった作品でも、新しく生まれた手探りの作品でも、片隅にとらわれていると世間の人から関心を得られず、独りうろうろするほかないのかもしれませんが。このような状況は今の文学界では珍しくありません。この難題について、二人の日本の作家が一定の現実的な道を探し出したようです。

太宰治の『お伽草紙』の「舌切雀」は、日本の昔話「舌切雀」を改作したもので、乙一の『箱庭図書館』に到っては全作がネットに投稿された作品の改作です。改作はオリジナルのように独立して存在するものではありませんが、改作の持つ進化と昇華の意味は軽視できません。

改作は時代の襤褸の中で生まれ、個人の意識を先人の文字にしみ込ませて豊かな血肉と新しい魂をもたらすことができます。太宰治の「舌切雀」は決して単純な引き延ばしではありません。かつて教化に適していただけの、善良を賛美する寓話が、より複雑で深いテーマの、太宰治の個人の特徴を帯び時代を映し出した小説に書き直されているのです。彼はこの作品の冒頭で制作の意図を、「日本の国難打開のために敢闘してゐる人々の寸暇に於ける慰労のささやかな玩具として恰好のものたらしむ」と表明しています。身分制度に基づいた教化のテキストはもはや必要とされておらず、分かりやすく新しい発想の小説こそ生命力を持つのです。「お爺さん」と「お婆さん」の世間話は、もともと戦争のストレスで精神のやせた人の話の種に適しています。このような物語は、ただ浅く読むだけでも多くの面白みがあります。「おれは何もしてゐないやうに見えるだらうが、まんざら、さうでもない。おれでなくちや出来ない事もある。おれの生きてゐる間、おれの真価の発揮できる時機が来るかどうかわからぬが、しかし、その時が来たら、おれだつて大いに働く。」ここで「お爺さん」が前向きな言葉を含めているのは、戦時中の人々の希望に対する渴望に合っています。

太宰治は誰でも楽しめることを保証すると同時に、自分の文学の追求を放棄していません。本を読んでばかりで欲求がないと自称する「お爺さん」と、俗っぽくて無知だが心を尽くして「お爺さん」の世話をする「お婆さん」は見たところ完全に対立する人物ですが、実際には互いに入り交じっており、二人の間の鋭い対立の細かい描写は当時の人間性の縮図を描写したものになっています。また、作者は原作の流れにも手を入れています。中でも目立つのは結末部分の加筆です。お爺さんはお婆さんの持ち帰った金貨のおかげで一国の宰相になり、最後にいつもと全く違って妻のおかげだと感慨を覚えています。これはお爺さん

が自分の本来の姿をそれなりにわきまえているということで、作者による功利主義のへ風刺と当時の日本社会対抗に対する再考です。太宰治の書き直しにより、古くさいテキストが実際に体験したことのように感じられる血肉と時代の魂を手に入れました。もともと永遠にその場をうろうろしていたであろう古典が前へ歩きだし、文学の意味の上の溝を打ち破って、後世の人と交流し共鳴する能力さえ得たのです。

太宰治の改作をうら寂しいと言うならば、乙一の改作は賑やかなものです。「オツイチ小説再生工場」という企画を通して、ボツになったネット小説の原稿がいくつか乙一の靈感の源になりました。『箱庭図書館』のあとがきで、乙一は小説の創作過程を述べ、彼の選出した文章の長所と欠点を講評しました。内容の混乱した作品であっても、未完成さに優れてさえいけば、彼の手で新たな生を得ることができます。敢えて原作の世界を書き換える筆致で尊重、描写、傾聴したものが、最終的に作品になるのです。こうした書き直しは未熟な原作者にサプライズの可能性を感じさせ、またまた著名な作家の靈感で原作の穴を埋めるものです。乙一は「この作品を書いたことで自分が少しは成長したようだと感じる」と明言しています。こうした創作モデルには怠惰の疑いが持たれるかもしれませんが、明らかに賑やかな、思想と思想の衝突で、経験と革新の融合です。『箱庭図書館』の裏で、若い思想の火花が経験豊富な作家の言葉により消える運命を回避し、「乙一」という燃料の助力のもと、きらりと光る光芒が自身の束縛を抜け出して世界に放たれたのです。

二人の作家は実のところ異なる闘いに関わっており、片や時代、片や経験ですが、いずれも日本の文学の発展に向かって始めた闘いです。日本の文脈はその位置する地震帯のように揺れて打撃にあっても壊れることはありません。2人の作家の改作は新しい手術の術式のようなもので、日本社会の進化と共に精神上的の激しい揺れ動きを形成しました。戦争がもたらしたのは社会背景の変化のみならず、文化のあり方の巨大な割れ目でした。それにより日本の文学に戦前、戦中、戦後とはっきり異なる傾向が現れています。太宰治の改作は、その場をうろうろし、危機の到来にまるで気づかなかった日本の伝統文学を再生させる救済です。日本が凝り固まっている今の時代、どんな固定の文学形式でも功利主義のもと融通が利かないものです。改作そのものが退化して無味乾燥な経験にさえなってしまう。乙一の改作は文学の発展の最も重要なものを捉えて、経験と低俗な選択との対抗を利用している貴重なもので、日に日にだらける日本のライトノベル産業に対する間接的な洗礼だといえます。改作は2人の作家の個人の意志に基づいており、日本の文学の成長と墮落が織りなす伝承を証明するものでもあります。

時代に迎合してあまりにも媚びへつらうと、正道に反してまた滅亡に向かうでしょう。時代の難局に直面して、日本の作家であれ中国の作家であれ、歴史に埋もれた作品を意識的に

拾い上げ、自分の筆致で「磨き上げ」てこそ、世界観と方法論が歴史的な脈から逸脱するのを防げるのです。市場経済が経験の価値を強調し、慣れない革新は大衆に受け入れられにくいため、「再生工場」の形式はやむなく「下がることで進む」傾向を見せています。落ち着きのない社会背景のもとで、まだ汚染されていないテキストを引き立てれば、ある程度は芸術の惰性を克服して、文学市場を革命の発展へと導くことができます。

書籍はテキストで構成されています。テキストが足踏みしては、書籍も結果的に行き詰まってしまいます。テキストの圧迫と束縛は、文学の従事者が自分のペンで解き放ち、人々の目で開く必要があります。改作の働きは多くの作家の実践のもとで証明されており、テキストが前へと踏み出す道です。日本、中国、そして世界の文学は、いずれも明るい空の下で模索しており、改作の他にもより多くの道を急ぐ必要があるようです。

読んだ図書：

『御伽草紙』（天津人民出版社）

『箱庭図書館』（人民文学出版社）